

特集
デザインコレクションの巨人
永井敬二



見たい、聞きたい、知りたい。

普段、何気なく過ごしている毎日の中で、稀にハッとする物語や、心動かされる人物に出会うことがある。そして、出会う前と後とは、少しだけ景色が変わって見えることもある。野心、夢、執着、葛藤…。人間はかつて、生きるために様々な感情をフル稼働しながら生きてきたはずだ。しかしながら、そのような「濃い感情」に蓋をして、なかったこととして生きることが「賢い」のだと知らず知らずに植え付けてこられたようにも感じる。「大人になる」という言い訳を自ら重ねながら。

「OH!」は、心の奥に隠された魂の叫びである。美しいものに出会ったとき、面白いことを見つけたとき、美味しい食事を口にしたとき。私たちはその瞬間、言葉にならない感情を吐き出し、本当の自分になれる。全国に、世界にアクセスし、多種多様な人、モノ、コトを受信・発信している福岡には、私たちがまだ出会っていないたくさんの「OH!」が眠っている。ウィキペディアでは見つかることのない「OH!」を探し、掘り下げ、心を動かす。読んだ人の目に映る景色を、少しだけ変える。そんなMagazineを綴って行きたい。

特集

デザインコレクションの巨人

永井敬二

インテリアデザイナー永井敬二。椅子好きなら誰もがその名を知っているほど、椅子をはじめ様々な「モノ」を収集する世界的なコレクターだ。50年にわたって、自身の「見たい、聞きたい、知りたい」という旺盛な好奇心の赴くままに集めたアイテムはもはや本人にも把握できていないほど膨大だ（椅子だけでも優に1000脚以上）。マニアが見れば涎が出るような逸品・希少品が無造作に置かれた永井氏のオフィスで、氏がどんな想いでモノたちと付き合ってきたかを聞いた。



Master of
Design
Collection
Keiji Nagai



幼少期を老舗旅館で過ごし、 お年玉でインテリア雑誌を買う。

——いつ頃からインテリアやデザインに興味をお持ちだったんですか？
僕の伯父が洋々閣（120年の歴史を持つ唐津の老舗旅館）の先代で、子供の頃はそこで育ったのです。伯父は毎晩のように晩酌していて、伯父の前に座らされて数奇屋とはなんぞやとか、千利休がどうだとかを聞かされていました。それが嫌で嫌で（笑）。でも伯父の本棚には「モダンリビング」という雑誌やインテリアの本も並んでいて、そういう本を見せてもらうのは好きでしたね。高校生の時、お年玉で雑誌の「室内」とか買ったりしていました。その時代は理解できないことばかりだったけれど、伯父が講釈してくれたことや洋々閣で過ごした体験が今につながっていると感ずることが多いですね。

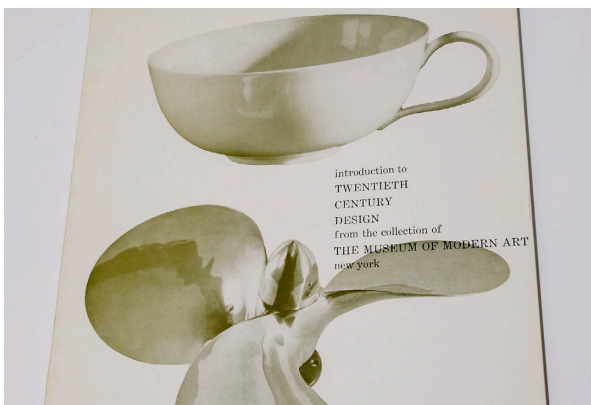
——その後、モノを追いかけるきっかけは何だったのでしょうか？ 社会人になられてからですか？

高校を卒業したあと、1966年に岩田屋の関連会社である岩田屋産業に入社しました。家具関係の部門で働きながら、別の関連会社でもあったNIC（岩田屋と西日本鉄道が立ち上げた伝説のインテリアショップ）にも影響を受け、そうい

度を利用して、なんとか手に入れ続けてました。当時もそうですが椅子のコレクターになろうなんて思ったこともなかったし、ただ欲しい一心で自分で「いいなあ」と思ったモノを、いろんなツテを使って手に入れるということを繰り返してましたね。国内で手に入らないものは海外に出掛ける人に頼み込んで買ってきてもらったり、一脚、また一脚と増えて、気がついたらすごい数になってたという感じです。

——そこからモノを買い始めることになるんですね。

初めて自分で手に入れた椅子がスーパーレジェーラ（Gio Ponti Design）でした。この時の感動も忘れられないですね。職場の先輩の中には生活費を切り詰めて土地やマンションを購入したりする人もいましたが、僕はそういう事が考えられませんでした。それよりも、素敵な食器で食事をしたり、好きな椅子に囲まれて生活をしたと思っていました。でも給料が1万3800円の時代。欲しい椅子は一脚がその数倍もする。その時代、何でもすぐに買えるわけもなく、会社の月賦という制



永井氏が衝撃を受けた「20th Century Design from the Collection of The MoMA展」のカタログ。写真中：昔のインテリア雑誌のコピー。「資料のコレクション」もまた膨大で驚かされる。

メーカーやデザイナーではなく、 自分でいいと思ったモノを。





永井氏が年賀状用に撮影している写真。並べられる椅子は毎年変わる。



モノを通じて国内から国外へと 交流が広がっていく楽しさ。

——椅子の魅力ってなんでしょう？
フォルムの美しさを眺めて楽しめる、そして直に触れることもできるうれしさ、そして座ることでも自分も一緒に主役を演じられる喜びがあるんですよ。椅子にも個性があってその椅子を創った作家の情熱が椅子を通じて伝わってくるので。心ときめく椅子に出会ったときは、その作家と出会ったような感動があります。

——いわゆる「コレクター」として周囲に認知されはじめたのはいつですか？

会社勤めを長い間していたのです

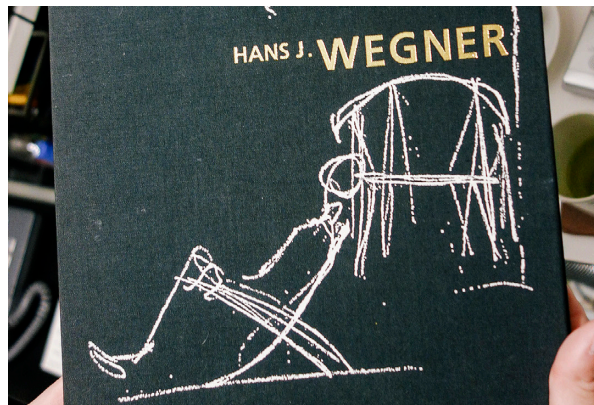
が、その間に読売新聞社の「木の家具」や家庭画報などの取材を受けたりしてました。そんな状態で82年に市の美術館や秀巧社ギャラリーで椅子の展示会をやることになったときに、我ながら「会社員の分際で…と気が引けてしまって、ポーズとして会社に辞表を出して様子を見たんですよ。するとあっさり受理されてしまつて（笑）。そのまま退職となり、「ケイアンドデザインアソシエイツ」設立ということになってしまいました。その後は東陶機器のカタログ関連の仕事やインテリアの仕事もこなし、数々の展覧会もしたりして、現在も続けています。国内の家具

メーカーの工場だけでなく、イタリアのカッシーナ社やハンス・ウエグナーのデザインした椅子などの工場見学などで交流を深め、ウエグナーさんやポール・ケアホルムさんの椅子の展示会を福岡で開催したりしてたのです。そのことがデンマーク王国から、椅子の展示会や出版物がその国の広報活動に寄与したということで評価され、表彰されたり、海外の雑誌にも取り上げてもらつたりといろんな形でつながっています。75年に初めての海外渡航を皮切りに「見たい、聞きたい、知りたい」という想いで堰を切つたように出掛けるようになりました。ただ思うのは、

経済性だけを 求めたら、 良いモノは 生まれない。

福岡にデザインミュージアムが出来ればいいなあと思つたりもしますが、そういう話は聞こえて来ないですね。経済ばかりが優先されて、文化的ゆとりがだんだんなくなっているように感じています。企業もグローバル化して、モノを売ることが第一優先になってきていて、そういう思想からは良いモノは生まれにくいと感じています。ただ、今は若い人たちもインテリアなどに興味を持つ人も増えてきてますし、いろんな情報もすぐに手に入るので、年代にとらわれずに同じ価値観で若い人たちと話せるのはうれしいですね。

——今でも「モノが欲しい」という気持ちは変わりませんか？
今でも変わらないです。欲しいモノ



永井氏がこだわって自作したウェグナーのカタログ。

モノはあくまでコミュニケーションの道具なんですよ。モノを通じていろんな人と出会い、お付き合いができることが面白いんです。だからか知りませんが「この膨大なコレクションはどうするんですか？」と聞かれることもしばしばです。どうもしません（笑）。死んだあとはどうにでもしてくれと思っています。

——いまの福岡や世の中について思うことがありますか？

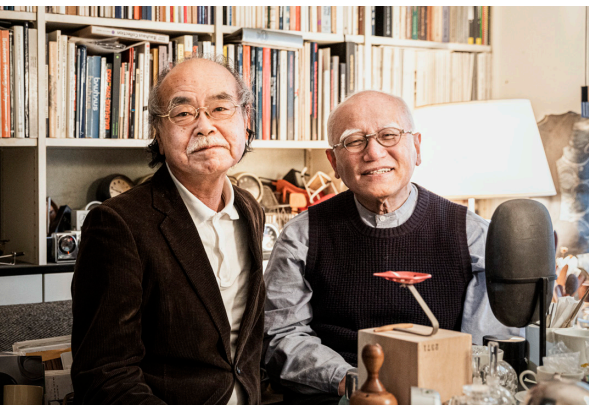
福岡はモノを見る目はあると思うんですが、何かを生み出すということとはなかなか難しいのではないかと感じています。

ノがあつたら、今、持っているモノを売つてでも手に入れたい。最近では、100円均一ショップで見つけた「ちり取りのデザイン」が気に入って買い求めましたよ。このようなモノにも感動し、かかわっている人にも想いを寄せています。

永井敬二氏（写真右）

インテリアデザイナー。福岡市在住。岩田屋関連会社勤務を経て、福岡市で「ケイアンドデザインアソシエイツ」を設立。椅子を中心としたコレクションをきっかけに文化交流に貢献している。

インタビュー協力：中村久二氏（写真左）
設計者、ランドスケープ・アーキテクト。福岡生まれ。株式会社ZEN環境設計代表。アイランドシティ、シーサイドもちはじめ、多数の都市計画、街づくりを手掛ける。





撮影場所：光明禅寺（福岡県太宰府市） 写真・文：矢島英右（オー・エイチ・アイ）

私の景色

スタッフの心に残った景色、忘れられない風景を紹介します。

OH!
MAGAZINE
FUKUOKA

発行人：
株式会社 オー・エイチ・アイ
株式会社 大井不動産

編集長：
宮元健一郎（利助オフィス）

編集：
緒方勝彦（RAIL）
松田正志（文と絵）

AD：
森下裕治（デザインの森下）

制作：
河埜和泉（オー・エイチ・アイ）
矢島英右（オー・エイチ・アイ）
木下忠行（大井不動産）
井川知子（大井不動産）



右：OHIグループ代表（代表取締役社長）井川英治
左：大井不動産（代表取締役社長）井川信治

創刊に寄せて

OHIグループ代表（代表取締役社長） 井川英治

平素より格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。
私たちは、企業活動を通じて生まれる様々な「ご縁」を大切にしたいと考えております。このたび、OHIグループは広報誌「OH！マガジン」を創刊いたしました。デジタル主流の時代ではございますが、あえてこれまでお付き合いのあった方、またそのご家族やご友人など、さまざまな方々に本誌を手にとらせていただき、読む人の心を潤せるものになれば幸いです。そして、福岡が持つ文化的な奥深さを感じていただければと思います。永井敬二さんに初めてお会いしたのはずいぶん昔のことですが、お会いした時の感動が忘れられず、創刊号にぜひという思いでご登場いただきました。永井敬二さんと、永井さんとのご縁をつないでくださった建築家の中村久二さんに深く感謝いたします。

ご近所グルメ紀行

教えたくないけど教えちゃいます、私の街の美味しい名店。

『ろっぼんぽん』のたいもち



38年前に廃線となった旧筑肥線。その廃線跡を活用した梅光園緑道を背にした気になる通りがあります。人が溢れてなかなか入れないうどん屋、知名度の高いパン屋、焙煎に力を入れたカフェ、全国からマニアが訪れる蕎麦屋などが不思議なくらいこの一画に集中しています。その中でも、ひと際昭和感漂う「ろっぼんぽん」。店の軒先には「からあげとたいもち」と書かれています。この「たいもち」とは、もち生地で作られたたい焼きなのですが、これが食べてみると想像とはまた違い、懐かしくも新しくもあり、例えるなら…なんて考えているうちにべろり。また必ず足を運びたいかならずです。テイクアウトのみですが、店先のベンチで行きかう人を眺めながら食べるのもオススメです。

福岡市中央区六本松4-7-4

11:00 ～ 20:00(売切次第終了) 木休 文：河埜和泉（オー・エイチ・アイ）

沼へようこそ

一度ハマったら抜けられない！ ディープな趣味の世界への誘い。

ひとりキャンプ



自由という時間は
現代において
贅沢なもの、
アウトドアなのに
インドアな世界へ。

普段生活をしている人は何かしら時間に縛られて生活をしています。そういう世界を抜け出したいくなる時に私はひとりでキャンプへ出かけます。いわゆる「ソロキャンプ」。到着したら、まずはビール一本、少しほろ酔いでテントを組み立てながら、自分のこだわりのキャンプギアをいつもの定位置へ。まるで自分の部屋を作っているような感覚です。日が沈みかける前に近くを散策しながら落ち葉や枝を集めながら、キャンプの醍醐味である焚き火の準備を始めます。薪が弾ける音と木々が風に揺れる音、何をするでもなく考えるでもなく、ただ火を眺めているだけで現代社会で時間というものに縛られている事を忘れることができます。アウトドアなのにインドアという自分だけの空間を皆様も経験してはいかがでしょうか？ 文：木下忠行（大井不動産）

勝手に映画宣伝部

絶対見てほしい「私のお気に入り映画」を勝手にPR！

キングスマン

（2014年/監督：マシュー・ヴォーン）



ロンドンのサヴィル・ロウに位置する店“キングスマン”は表向きは高級テラー。実はその正体はどの国にも所属しない紳士スパイ組織で前代未聞の人類抹殺計画を進める凶悪な敵に立ち向かう姿を描くという内容です。スパイも悪役もクレイジーで面白いの一言ですが、スパイの紳士的でありながらユーモアたっぷりのアクションは必見！ 残酷なシーンもノリのいい音楽との調和で思わずニヤッとしてしまうような軽快さがあります。クライマックスの想像を超えた花火のシーンはとても印象的。この映画はイギリスに根強く残る階級社会を皮肉った映画でもあり、「紳士」とは生まれの階級ではなく学ぶものだという事を考えさせられる内容です。第2弾まで放映されていて、今年の12月には第3弾の公開が予定されているとてもおすすめの作品です。

文：井川知子（大井不動産）

読書灯

たまにはゆっくり読書でもいかが？「私の愛読書」をご紹介します。

選択の科学

コロンビア大学ビジネススクール特別講義



シーナ・アイエンガー（著）、櫻井祐子（訳）
文藝春秋/1700円

コロンビア大学のビジネススクールの教授である著者は、インドから移民としてアメリカにきた厳格なシーク教徒の家庭で育ち、自分では食べ物さえ選ぶことができず生活をし、目の疾患により高校の時には完全に視力を失いました。その彼女が、アメリカでの生活で「自分で自由に決めることのすばらしさを通じて、

20年以上にわたる「選択」という一点についての実証実験を行い書かれた本となります。人生とは3つの事から成り立っていて、それは「選択」「自由」「運命」であること、この中で自分ができることは「選択」することだけ。事例を通して、「選択」することを改めて考えさせられる本の内容となっています。

文：木下忠行（大井不動産）